

JICA's world

FEBRUARY 2010 No.17

2

特集

私にも未来はあるの？

—子どもたちの明日をはばむ現実





敬虔な仏教徒が多いスリランカ。満月の日はポヤデーと呼ばれ、聖なる祝日に当たる。店は休みとなり、人々はこの夜に参り、寺院にお参りに出掛ける。一見、日本の初詣で風景と変わらないようだが、禁酒になるところがお神酒が付く物の日本とは違う。聖なる日は心静かに過ごそうということだろうか。

実質の首都であるコロンボでは、スリランカ暦のNAVAM(ナワン月)のポヤデーに、人々が2日間にわたりペラヘラ祭りに酔いしれる。ペラヘラとは、「行列・行進」という意味。仏舍利を掲げた人々がガンガラマヤ寺院に参拝、マヒンダ大統領の手によって仏舍利が納められるとパレードが始まる。

全国から集められた象には装飾が施され、伝統的なダンスやドラマー、たいまつ持ち、旗持ち、火渡りダンサー、僧侶などが、寺院の前に広がるペイラ湖の周りを一晩中行進する。

スリランカ各地で開催されるペラヘラ祭りだが、コロンボのナワン・ペラヘラ祭りは1979年から開催され、昨年で30周年を迎えた。2010年は2月27、28日の2日間が開かれる予定だ。

春 夏
秋 冬

17

ナワン・ペラヘラ祭り

聖なる夜の行進



Contents

02 春夏秋冬 聖なる夜の行進

04 特集
私にも未来はあるの？
—子どもたちの明日をはばむ現実

明日を描けない子どもたち
あふれる笑顔と心安らぐ居場所を ケニア
暗闇に生きる命を救うために タイ
もう一度、学ぶこと、生きることの喜びを シエラレオネ
幻肢痛との闘い ボスニア・ヘルツェゴビナ
障がいを乗り越え外の世界へ羽ばたこう パキスタン
心から笑える日が来ると信じて 南アフリカ共和国&ガーナ
地域住民が一体となり子どもたちを守る ニカラグア
世界の子どもと向き合う青年海外協力隊



22 ゲンバの風 佐藤 真江 JICA専門家

24 地球号の子どもたち
カンボジアの子どもたちに
夢と学びの場を



26 ココロとココロ 真の平和を求める若者たちへ 開発と権利のための行動センター
～届け 私たちの思い～
28 JICA に聞きたい! 授業で途上国について教えたい、どうすればいい?
29 JICA UPDATE
30 イチオシ!

31 地球ギャラリー
ベネズエラ
自然に抱かれて育つ
ワラオの子



39 MONO語り 森の恵みが生み出したランチョンマット
40 MY ACTION 黒柳 徹子 女優



JICAのビジョン

すべての人々が恩恵を受ける、
ダイナミックな開発を進めます

Inclusive and Dynamic Development

表紙 ©Alamy/PPS通信社

路上で物ごいをしている女の子
(インド)。満面の笑みの裏には
厳しい現実がある。



少年兵・地雷

紛争地に暮らす子どもは推定10億人以上。中には、武器を手に兵士として武力集団などで働かされたり、性的搾取や強制結婚の対象にされる子どももいる。地雷や不発弾に不用意に近づき手足を失うのは、好奇心旺盛な子どもである場合も多い。

>>事例は

P12「もう一度、学ぶこと、生きることの喜びを」、
P13「幻肢痛との闘い」を。



障がい児差別

障がい児の割合は国によって異なるものの、多くの途上国では養護学校などの支援体制が整っておらず、適切なサービスやケアを受けられない。また、閉鎖的な社会背景のもとで、そうした子どもたちを家の中に閉じ込めておく場合も多い。

>>事例はP14「障がいを乗り越え外の世界へ羽ばたこう」を。



子どもなら誰しも、親の愛情を受け、健やかに成長していく「権利」が与えられている。「子どもの権利条約」は、子どもたちの生きる権利、守られる権利、育つ権利、参加する権利を、国際的に保障するために定められており、ほぼすべての国がこれに締約している※。にもかかわらず、いまだ世界には、さまざまな理由から基本的な人権すら保障されない子どもたちがたくさんいる。明日の自分を夢見るどころか、今日、生きることさえままならない子どもたち。未来をはばむこの現実、目を背けてはいけない。

※2010年現在の締約国は193カ国地域。日本は1994年に批准している。
参考：国連児童基金(UNICEF)「子どもたちのための前進レポート」2007/2009



ストリートチルドレン

路上で暮らすストリートチルドレンは推定1億人。家計を助けるために町へ出て物ごいをしたり、暴力に耐え切れず家を飛び出したり、親を亡くしたり、親が育児を放棄したりと、その理由はさまざま。病気になっても、治療費が支払えず親に見捨てられる子もいる。

>>事例はP6「あふれる笑顔と心安らぐ居場所を」を。

不適切な処遇

非行による補導から、万引きなどの軽犯罪、傷害や殺人などの重犯罪まで、途上国では子どもたちが一緒に処遇される場合が多い。また、留置場や刑務所では、暴力が合法的な処罰の手段となっている国もある。

>>事例はP6「あふれる笑顔と心安らぐ居場所を」を。

特集

明日を描けない子どもたち



HIV/エイズ

HIVに感染している子どもは約230万人。その90%が母子感染で、治療を受けなければ2歳になる前に命を落とす可能性が高いが、その多くの家族は貧しくて治療費が捻出できない。エイズで親を亡くした孤児は2010年、2,000万人を突破するといわれている。

>>事例はP16「心から笑える日が来ると信じて」を。



虐待・体罰

しつけという名の下で、親や学校の先生などから虐待や体罰を受けたことのある子どもは、毎年約5億人~15億人。しかし虐待や体罰は、地域によって社会的・文化的に容認されていたり、人目のない場所で行われるため、実態を把握することが難しい。

>>事例はP19「地域住民が一体となり子どもたちを守る」を。

児童労働

お手伝いの枠を超えて、健康や就学が妨げられるような危険な労働に就く子どもは推定1億5,000万人。貧しい家庭では、子どもが大切な働き手となり、家計を支えなければならないからだ。教育の機会を奪う子どもの労働は、再び貧困を招くという悪循環を引き起こしている。



出生未登録

氏名と国籍を持つことは人間の権利。しかし、途上国の3カ国に1カ国で出生登録率が50%に達していない。費用がかかること、登録施設が遠いこと、そして親の認識が低いことが主な理由だ。出生未登録の子どもは、教育や保健など、ほかの子と同等の行政サービスが受けられない場合が多い。



人身取引

さまざまな労働に従事させられる子どもたち。中でも特に、貧しさからわが子を手放さざるを得ない親もいる。性的搾取を経験した子どもは、HIV/エイズなど感染症の危険にさらされ、教育の機会を逃すだけでなく、一生、そのトラウマに悩まされる。

>>事例はP10「暗闇に生きる命を救うために」を。



「キョーコ、キョーコ!」と、山本さんの周りにはいつも子どもたちの姿が



チルドレンは30万人以上、孤児は240万人にも上るといわれている。

ケニアは、職を求めて農村から都市に人口が流入、地縁血縁を基盤としたコミュニティが弱体化し、地域ぐるみで子どもを守るという伝統的な社会システムが消えつつある。路上生活を送るストリート

ガイドブックに再三と書かれていた注意を思い出した。街並みを見る限り、治安上の危険はそれほど感じなかったが、ビル群のすぐそばに広がるすさまじい規模のスラムを目にしたとき、腑に落ちた。貧富の差という問題がケニアに重くのしかかっているのだ。聞けば、世界に衝撃が走った2年前の大統領選挙後の暴動以降、格差は拡大し、治安の悪化も招いている。そしてこの影響は、飢えや病気のほか、児童労働、路上生活、薬物、飲酒、非行、犯罪といった形で、罪の

ない子どもたちに暗い影を落としている。「本来なら子どもは、家族やコミュニティに守られながら育っていくもの。しかし、貧しいがために親は子どもを捨てざるを得なかったり、危険な場所で働かせたりしてしまいます。そうした子どもたちは誰に保護されることもなく路上で生活するようになり、生き延びる術として非行や犯罪に手を染めてしまっている」

市街地から車で約30分、青年海外協力隊が活動するナイロビ孤児院を訪ねた。ここには、路上で保護されたり、両親を亡くしたり、育児放棄に遭った0〜10歳の子どもたちが、常時70〜90人が暮らしている。親と離れ離れにある幼い彼らは、一体どんな表情をしているのだろうか。恐る恐る中に入ると、満面の笑みで駆け寄って来る子どもたち。その上、われ先にと競うように抱っこをせがんでくる。「毎日こんな感じなんですよ」と山本恭子隊員(幼児教育)が言う。

取ることで、いつか、自分は愛されて育ってきたんだと思ってもらえるようにしたいんです」そんな山本さんの周囲には、いつもたくさんの子どものたちが集まる。庭に咲く花を髪飾りにして彼女の頭に乗せてくれる女の子や、「キョーコ!キョーコ!」と叫びながら手を引っ張る男の子。山本さんが子どもたちに愛されている証だ。



(上)ビルが林立するナイロビ市内の様子
(下)まだ一人で立つこともできない幼いこの子ども、ナイロビ孤児院で暮らす

ストリートチルドレンが生まれる最大の原因が貧困。養育費に困って子どもを手放したり、稼ぎ手として物ごいをさせたりと、親の都合で路上生活を余儀なくされるケースが多い。また、罪を犯した子どもたちは、子どもの基本的人権の原則に従って処遇されなければならないが、重罪ではなく、家出や無断欠席、飲酒などの非行や軽犯罪である場合も、子どもの権利を無視した司法制度で裁かれてしまうことがある。



あふれる笑顔と心安らぐ居場所を

アフリカの中でも比較的経済状況が良いとされるケニアだが、その影で貧富の差が拡大し、子どもたちの健全な成長が妨げられる要因となっている。30万人のストリートチルドレン、240万人の孤児—これがケニアの現実。この状況に立ち向かうケニア人・日本人を取材するため、首都ナイロビに飛んだ。



増加する非行・少年犯罪とストリートチルドレン

さわやかな風がほおをなでる12月上旬の首都ナイロビ。一瞬、ここがアフリカであることを忘れてしまいそうになるほど、過ごしやすいく気候だ。空港から中心部へ延びる道路脇には、観光客に人気の国立公園が広がる。運がよければ野生のキリンにも

出会えるという。市内に入ると、林立するビルや高級ホテルが目飛び込んできた。東アフリカで最大規模の経済水準にあるケニア。朝夕のラッシュ時になると一向に進まなくなる車列が、それを象徴しているかのようだ。「街は一人で歩かないように。車移動もロックは忘れずに」渋滞に巻き込まれた車中で、



昼食を終えてもうひと遊びした後はお昼寝タイム。一つのベッドに5〜6人、肩を並べて眠るナイロビ孤児院の子どもたち

涼しい季節でも昼間は強い日差しが照りつける。この日、警察車両に先導されて郊外の警察署に向かった。

補導や逮捕された子どもが、最初に連れて行かれるのは警察署だ。そして署内で取り調べを受ける。子どもたちはその後、鑑別所（児童局管轄）で生活しながら裁判所（裁判所管轄）による鑑別結果を待ち、年齢や犯罪の軽重、再犯の危険度などによって、少年院（刑務所管轄）あるいは更生学校（児童局管轄）というように処遇決定を受ける。犯罪ではなく保護を要する子どもであれば、警察署からそ

では対外試合を行い、勝利するまでになっている。

キャプテンの男の子（17歳）は、ここに入所して2年になる。両親が離婚、新しい母親と馬が合わず、最後はナイフを手に「家を出ろ」と脅迫してしまった。「でも、今は見違えたような成長を遂げている」と矢端さんと言う。地味な練習メニューも一つ一つ真剣にこなし、試合でもリーダーシップを発揮。地域の選抜メンバーにも召集された。

のままだ孤児院や児童養護施設などに送られることもある。

「ですが今、このシステムがうまく機能していません」と児童局上級児童専門官のアイ・ワイチンガさん。凶悪犯罪と軽犯罪の子が同じ施設に送られる場合や、大人と同じ扱いを受けることがあるという。その理由としてワイチンガさんは、「各段階で子どもたちと接する警官、裁判官、刑務官、児童専門官、児童保護司、保護観察官などのスタッフの子どもの処遇に関する知識・能力が十分ではないから」と続ける。01年に児童法が施行され、非行・犯罪少年などの保護・支援に取り組んでいるケニア政府だが、資金や人材が不足し、10年近くたった今もその成果は十分とえない。ワイチンガさんは、「現状では、取

り調べで暴力行為があったり、鑑別所や更生学校などで長期間違法に子どもを拘束してしまうこともあり。子どもを正しく処遇するための能力向上が必要」と話す。

こうした問題を解決するため、2009年10月から始まったのがJICAの「少年保護関連職員能力向上プロジェクト」だ。児童局、保護観察局、警察、裁判所、刑務所など少年保護に従事する職員を対象にした研修を実施するための体制を構築し、非行・犯罪少年の処遇の一層の充実化・強化を図ることが目的となっている。

「8月に予定されている第1回目の研修に向けて、今は研修カリキュラムと教官向けの指導マニュアルの作成などを進めているところ。日当や交通費、

研修に必要な機材などの運営費はプロジェクトの経費ではなく、ケニア側の予算を使うようにします。JICAの協力が終わっても、彼らだけで研修を継続していくことが重要だからです」と、国連アジア極東犯罪防止研修所（UNAFEL）※からJICA専門家として派遣された菅野哲也さん。まだ種をまき始めたばかりのこのプロジェクト。終了する4年先が楽しみだ。

いまや世界で当たり前に使われるようになってしまったスマートフォンやタブレットという言葉。居場所を失った子どもたち。増え続ける非行や少年犯罪。未来を担っていく子どもたちの明日を希望あるものにしていく責任は、私たち大人に課せられている。

※国際連合と日本政府との協定に基づき、アジア・太平洋地域を中心とした国々の刑事司法行政の健全な発展と相互協力の促進を目的として、昭和36年に設立された国連の地域研修所。

100万人近くが暮らしているといわれる世界最大級のスラム「キベラ」。日中、学校に行かず、ぶらぶらしている子ども多い

それを肌で感じてもらえたら」。たつぷりの愛情で子どもたちの笑顔をはぐくむ山本さんの姿勢は、純朴な子どもたちの心に花を咲かせつつあった。

や犯罪も増加している。

ナイロビ孤児院から車で5分、カベテ更生学校に到着した。ここには、警察に補導されたり、軽犯罪を犯してしまった10〜18歳の少年約100人が入所している。最長3年の共同生活を通して、更生と自立を目指すための施設だ。

日本でいう少年院に相当するこの施設。ナイロビ孤児院とは対照的に、子どもたちに笑顔はない。心の傷の深さを物語っているのだろうか。

「校舎が塀に囲われていたり、厳重な警備が敷かれているわけではないので、脱走する子ども

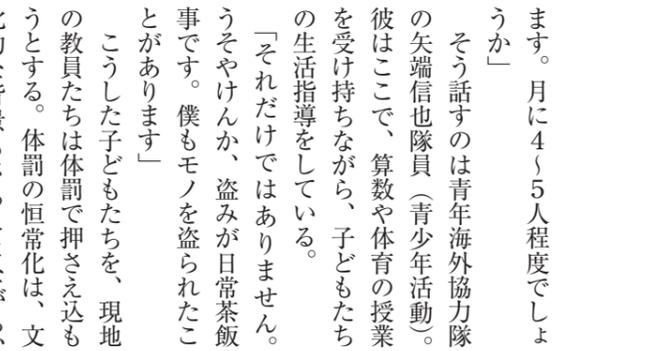
ます。月に4〜5人程度でしようか」

そう話すのは青年海外協力隊の矢端信也隊員（青少年活動）。彼はここで、算数や体育の授業を受け持ちながら、子どもたちの生活指導をしている。

「それだけではありません。うそやけんか、盗みや日常茶飯事です。僕もモノを盗られたことがあります」

こうした子どもたちを、現地の教員たちは体罰で押さえ込もうとする。体罰の恒常化は、文化的な背景もさることながら、更生学校の人手不足や予算が少ないことも影響している。「体罰はとも難しい問題。愛情があれば認められるということではないし、他方で、どうにかして威厳を保たなければ、子どもたちになめられてしまう」。赴任してから数カ月は葛藤の日々だった。

その中で見つけた一筋の光がクラブ活動。「けんかをしたり、悪事を働いたり、元気が有り余っている子どもたちにはスポーツで汗をかいてもらうことが一番だと考えたんです」。矢端さんは、自身の特技を生かしてサッカークラブを結成。放課後の練習から始まった活動が、今



（上）市街地のすぐそば、キベラスラムを含むランガタ地区の児童局には「月に150人近い子どもが連れてこられる」と、サロメ・ムサ児童専門官（左）の説明を聞く菅野専門家（右）。他の地区と比べても、とても大きな数字だ
（左）生徒たちとミニゲームで汗を流す矢端隊員。クラブ活動の時ばかりは、どの生徒にも笑顔が戻る



（上）カベテ警察署内の留置所。2畳程度の狭く薄暗い室内には、逮捕者が重なるように座っていた。この日、子どもはいなかった
（中）ナイロビ郊外のカサバニ留置所で、子どもの扱い方について説明する警察のコミュニティー政策・ジェンダー問題・児童保護局スドゥタ・ピトゥリマ・キリンギ局長（右から2人目）
（下）警察署によっては、子どもを担当する警官が配置される施設もある

世界では、強制労働や売春、家事労働といった搾取目的で、子どもたちが売買されている。アメリカ国務省の推定では、毎年60~80万人が国境を越えて取引されており、そのうち約半分以上が子どもであるとされている。待遇の良い仕事や結婚といった魅力的なチャンスをブローカーに約束された親が、貧困から逃れるために自分の子を委ねてしまうケースも多い。



暗闇に生きる命を 救うために

タイでは、国内外の多くの18歳以下の子どもたちが人身取引による搾取の対象として被害に遭っている。



被害者支援を より効果的に

1980年代以降の急速な経済発展に伴い、人・モノ・情報の国境を越えた移動が急増しているタイ。だが、その躍進の陰で深刻化しているのが、人身取引だ。タイは、日本や中近東、アメリカなどへの被害者の「送り出し国」であり、ラオスやミャンマー、カンボジアなど近隣国からの被害者の「受け入れ国」でもある。さらに、中国からマレーシアへ送られる人身取引の「中継国」



警察などに救出・保護され、シェルターで暮らす子どもたち。職業訓練の一環で装飾品作りを学ぶ。タイ人だけでなく、ラオス、ミャンマー、カンボジアなどから送られ、保護された被害者も多い(撮影:奥野安彦)

職業訓練の一環で、シェルターに暮らす人身取引被害者に、手工芸品作りを指導しているシニア海外ボランティアの飯島好美さん(左)。シェルターのスタッフたちと製品について相談する(撮影:奥野安彦)



にもなっている。そのため、人身取引対策は国を挙げて取り組むべき最重要課題の一つとして認識されている。

人身取引の被害に遭う者の多くは、18歳以下の子どもたちだ。タイ政府が保護した被害者のうち、8割以上が子どもとの報告もある。ときにはブローカーの甘い言葉に乗って親が生活のために売り飛ばし、ときには強引に連れ去られることもある。子どもたちは見知らぬ土地や外国へと送られて監禁や脅迫を受け、性的搾取の対象となったり、売春、組織的な物こい、建設現場や農場、工場での強制労働などを強要されたりする。当然、子どもたちへの報酬は期待できない。何度逃げても連れ戻され、HIV/エイズに感染すれば容赦なく捨てられる。また、ときには臓器移植のために内臓を摘出されることもある。そして、人生に取り返しつかない傷を負う。

こうした深刻な状況を受け、タイ政府は2008年、人身取引対策を促進するための政府の体制、犯罪の処罰、被害者の救出・保護に関して規定した「人身取引対策法」を施行。また、人身取引被害者の救出・保護、社会復帰・自立支援を効果的に進

めていくため、個々の被害ケースに対し、「多分野協働チーム」(MDT)を結成して対策に当たるといふ方法を中央政府レベル、各県・自治体レベルで採用している。

MDTは、警察官やソーシャルワーカー、被害者用シェルターの職員、NGO、弁護士のほか、入国管理局、検察などさまざまな分野の専門家で構成されており、被害ケースに応じて適宜メンバーが招集される。そして、①救出・保護、②被害者としての認定、③シェルターでの心理的・身体的回復、④教育・職業訓練による社会復帰・自立支援に至る一連の被害者保護・自立支援に取り組んでいる。

これは、異なる専門分野の人々が協働するための画期的な方法だが、一方で、関係機関の連携やスタッフの能力不足など運営面で課題を抱えており、包括的な対策が十分に機能していないのが実情だ。そこでJICAは09年3月より、MDTの運営能力向上を目的とした「人身取引被害者保護・自立支援促進プロジェクト」を開

始。MDTメンバーらを対象に、ワークショップや研修による能力強化に努めている。

より広くこの問題に 気付いてもらうために

09年11月には、MDTメンバーの関係者15人が来日。被害者の受け入れ国として、人身取引の撲滅に向けたさまざまな対策を進めている日本の取り組みを視察した。タイ・社会開発人間安全保障省社会開発福祉局のヤニー・レートクライ副局長は、「日本では空港・港での入国審査の強化などにより、不法入国で被害に遭う女性の数が3年間で6割以上も減少したと聞い



国立女性教育会館で行われた日本での研修では、人身取引や外国人の人権侵害に取り組むNGOとのワークショップや、入国管理局や警察など日本側関係者との意見交換も行われた

た。また、この問題に取り組むNGOや研究者、法律家によるネットワークが活発に活動するなど、参考になる点が多い。これらの成果を、MDTでの取り組みに生かしていきたい」と話す。「人身取引は決して他人事ではない」と強調するのは、プロジェクトのチーフアドバイザーを務めるJICA専門家の織田由紀子さん。「被害者は、私たちと同じように自分の将来の夢を現しようにしたり、家族の暮らしを良くするために働こうとしている人々や子どもたちです。そうした心理につけ込む犯罪組織を許してはならない。プロジェクトで被害者の保護体制を強化するとともに、広く人身取引の問題に気付いてもらい、一つでもこうした人権侵害をなくすことに貢献していきたい」。

世界では今この瞬間も、多くの子どもたちが、自分がどこにいるのか、何のために、誰のために働かされているのかも分からず、尊厳も希望もない暗闇の中で日々を過ごしている。力が弱いのがために抵抗しても抑えられ、大人のように権利も主張できない、そんな子どもたちの声を傾けなければならぬ。



反人身取引デーに、現地関係者らと出席した専門家の織田さんと古川緑さん(後列右から3人目、2人目)

だが、紛争の負の遺産はそれだけではない。地雷という名の悪魔の兵器が、人々の体と心に深い傷を残した。手足を吹き飛ばされたり、飛び散った破片で失明したり。戦火が過ぎ去つ

た今なお、地中には22万個の地雷が潜んでいる。「悪魔のおもちゃ」地雷がこう呼ばれるのは、犠牲者の多くが子どもたちだからだ。小さく色や形も多種多様な地雷は、時に「おもちゃ」にも見える。好奇心旺盛な子どもたちは、知らずに踏むだけでなく、不用意にそれに触れてしまう。

このNGOの活動を影で支えてきたのがJICAだ。ペイン

クリニックが専門の前田倫医師（西宮市立中央病院麻酔科・ペインクリニック科部長）をJICA専門家として派遣し、HOPE87のスタッフに治療法などを指導してきた。また2008年からは、ペインクリニックの普及を目指す現地政府の計画を後押しするため、「地雷被災者等に対するペイン・マネジメント・プロジェクト」を開始。主要都市の総合病院にペインクリニックのサテライトユニットを設置し、勤務する医療関係者へ技術指導やカリキュラム作成を行っている。

※痛みを和らげるための治療。

from ボスニア・ヘルツェゴビナ
BOSNIA and HERZEGOVINA

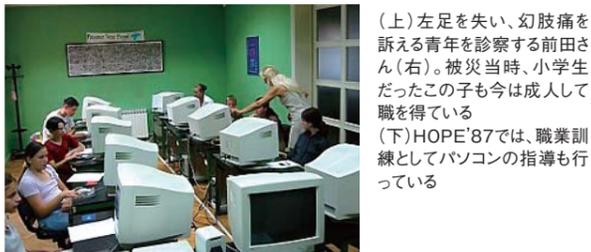
地雷

いまだに世界の78カ国に地雷が残されており、犠牲者の3分の1が子どもだ。命を取り留めても、治療やリハビリに必要な金銭的負担が貧困家庭にのしかかるばかりか、障がいを負った子どもたちは偏見や差別に苦しめられている。



幻肢痛との闘い

内戦により、いまだ22万個の地雷が地中に潜むボスニア・ヘルツェゴビナ。地雷によって失った手足が痛む「幻肢痛」が被災者を苦しめている。



(上)左足を失い、幻肢痛を訴える青年を診察する前田さん(右)。被災当時、小学生だったこの子も今は成人して職を得ている
(下)HOPE87では、職業訓練としてパソコンの指導も行っている

都市の総合病院にペインクリニックのサテライトユニットを設置し、勤務する医療関係者へ技術指導やカリキュラム作成を行っている。

ボスニア・ヘルツェゴビナ



少年兵

少年兵とは、18歳未満の男女による兵士のこと。その数は、全世界で推定約25万人。武装集団などに誘拐されていくケースによるものが最も多く、戦場では最も危険が及ぶ最前線に駆り出されたり、少女の場合には性的搾取の対象となることも多い。



もう一度、学ぶこと、生きることの喜びを

少年兵として戦うことを余儀なくされ、大きな心の傷を負ったシエラレオネの子どもたち。失った教育の機会を取り戻し、もう一度前に進もうと、地域住民が学校・教育環境の改善に立ち上がった。



(上)真新しい机で授業を受ける中学生。勉強ができることの喜びがあふれる
(下)学校が再開され、子どもたちにも笑顔が戻りつつある

内戦中は、多くの子どもたちが政府軍や反乱軍の一員として銃を手にした © AFP=時事

シエラレオネ



from シエラレオネ
SIERRA LEONE

※社会に出ることができない障がい者(星)を探し、社会参加ができるよう「磨いて」いくことがテーマ。



鉄道駅の駅長や駅員が協力し、線路沿いの清掃活動を実施。社会奉仕活動を通じた交流を、通常学校の校長も積極的に推進している

障がいを持った子どもたちにとって、家庭を出て、初めての社会参加の場となるのが学校だ。しかし、地域内の通常学校には受け

ない。障がいを持った子どもたちにとって、家庭を出て、初めての社会参加の場となるのが学校だ。しかし、地域内の通常学校には受け

などから法律は形骸化。そこで JICA は 08 年、この行動計画を後押しすべく、北西部辺境州のアボタバード県で「障害者社会参加促進事業（通称 A STAR プロジェクト）」を開始した。

障がいを持った子どもたちにとって、家庭を出て、初めての社会参加の場となるのが学校だ。しかし、地域内の通常学校には受け

ない。障がいを持った子どもたちにとって、家庭を出て、初めての社会参加の場となるのが学校だ。しかし、地域内の通常学校には受け



(上)6.5キロの長距離ウォークには、特殊学校の児童、医療従事者、県社会福祉局などから多くの人が参加。歩行者からも温かい声援が送られた(下)スポーツ大会で、風船を膨らませる競技に参加する子どもたち。障がい児と非障がい児が一緒になって、楽しい時間を過ごした

食料、保健医療、教育、環境の中で、開発途上国では障がいのある人々への社会保障が後回しになりがちだ。社会から排除さ

れ、貧困からも抜け出せない。負の連鎖に巻き込まれる障がい者たち。自分の力ではどうすることもできない小さな子どもたちも、孤独な生活を強いられている。

満たないという(非障がい児は約75%)。障がい者が原因で学校に行けず、将来への希望も持てない。そんな悲しい現実を背負いながらも、そこにはいつも、懸命に生きる子どもたちの姿がある。

が「国際障害者年」に定めた1981年以降、パキスタンのジャウル・ハック大統領(当時)は、障がい者の教育や雇用の法律・施設の整備などを積極的に進めた。そして2002年には、政府が「障害者国家政策」を策定。06年に「国家行動計画」が定められた。しかし、縦割り行政や地方分権の遅れ

途上国で障がいを持った子どもは、障がいを持たない子どもと比べて、学校に行けなかったり、行けても退学する割合が高い。また、社会で障がいに対する差別が払しょくされないため、子どもを外に出さない(出せない)親もいる。差別や社会的排除などが原因で、保健サービスを受けることができないケースも多い。



知的発達障がいのある子どもの家を訪問。同じ障がいを持ちながら働くスタッフ(左)を見て、刺激を受けてもらうことも目的の一つだ

障がいを乗り越え 外の世界へ羽ばたこう

社会保障制度が十分に整備されていないパキスタンでは、社会的な認識不足も相伴い、障がい者に対する差別がまだ根強く残っている。



通常学校で学ぶ肢体不自由の子ども。教職員と家族の障がいに対する理解により、この学校では地域の中でもインクルーシブ教育が進んでいる





(上) 予防・啓発のための劇を演じる青少年グループのメンバー。「活動を通じて、彼らのHIV/エイズの認識は確実に高まった」と、JVCの渡辺さん
(下) プロジェクトの一環で、感染者のための菜園研修も行われた。母親から母子感染した男の子も、菜園の野菜のおかげもあってすくすくと成長している

あるとき、エイズ
孤児がレクリエーシ
ている。
この重要性を伝え
差別・偏見をなくす
ための知識・情報や、
て、感染を予防する
ベントの開催を通じ
ちが楽しめる地域イ
ス、劇など子どもた
回、スポーツやダン
施。また、学校の巡
レーニングなどを実
スタッフへの栄養ト
作りや給食センター
改善を目的に、菜園
給食センターで出さ
れる食事の栄養価の

南アフリカ・リンポポ州から
北西に約5000キロ離れた、
ガーナ第二の都市・クマシ近郊。
エイズ孤児やHIVに感染した
子どもたちを支援する地元NGO
に配属されている青年海外協
力隊の浅里美咲さんは、よく知
る4歳の男の子の死にショック
Cの渡辺直子さんは話す。
で彼らと向き合ってきた、JVC
い、そう実感しました」と現地
をつくっていかなくてはならな
／エイズの脅威に負けない社会
てしまうんです。彼らがいつも
笑顔でいられるように、HIV

笑顔でいられる社会を
この国の最北端、リンポポ州
は、全人口の97%を黒人が占め、
国内でも最も貧しい地域の一つ
とされる。この州の2つの地区
21村で、2006年から、JICA
CAの草の根技術協力「住民参
加型HIV/エイズ予防啓発及
び感染者支援強化プロジェクト」
が、NPO法人シェアII国
際保健協力市民の会（SHARE
E）、NPO法人日本国際ボラン
ティアセンター（JVC）との
協働で実施されている。

は、全人口の97%を黒人が占め、
国内でも最も貧しい地域の一つ
とされる。この州の2つの地区
21村で、2006年から、JICA
CAの草の根技術協力「住民参
加型HIV/エイズ予防啓発及
び感染者支援強化プロジェクト」
が、NPO法人シェアII国
際保健協力市民の会（SHARE
E）、NPO法人日本国際ボラン
ティアセンター（JVC）との
協働で実施されている。

ランティアの育成、青年グルー
プによる予防・啓発活動の促進、
そして、地域で見捨てられがち
な、両親を失ったエイズ孤児や、
HIV/エイズで親が働けなくな
った貧困家庭の子どもたちな
どへのケアも行っている。
「面倒を見てくれる親戚もい
ないため、中には子どもたちだ
けで生活する家庭もあります」
と、SHAREの青木美由紀さ
ん。そうした子たちには、ボラ
ンティアがお世話をしたり、地
域の給食センターが食事を提供
する。SHAREとJVCでは、

「普段は笑顔で懸命に耐えて
絞るかのように歌い続けた。
彼女と同じ境遇にある子どもた
ちの心に響いたのだ。最後は全
員が涙しながら、悲しみを振り
絞るかのように歌い続けた。
「普段は笑顔で懸命に耐えて
絞るかのように歌い続けた。
彼女と同じ境遇にある子どもた
ちの心に響いたのだ。最後は全
員が涙しながら、悲しみを振り
絞るかのように歌い続けた。」
「普段は笑顔で懸命に耐えて
絞るかのように歌い続けた。」
「普段は笑顔で懸命に耐えて
絞るかのように歌い続けた。」



ガーナ 南アフリカ共和国

広がり続けるHIV/エイズの脅威は、確実に子どもたちにも及んでいる。国連は、エイズで死亡する6人に1人、新たなHIV感染者の7人に1人が子どもと推定している。多くの幼い命が奪われるだけでなく、エイズで親に先立たれ保護者を失った孤児には、過酷な現実が待つ。感染予防知識の不足による、10代の感染も急増している。

心から笑える日が来ると信じて

子どもたちの生活や未来を脅かすHIV/エイズ。
感染率が世界で最も高いサハラ以南アフリカの子どもたちが、
その脅威がもたらす厳しい現実と直面している。

給食センターに集まったエイズ孤児（南アフリカ）。プロジェクトを通じてできた野菜を使い、栄養価の高い食事が1日3食出されている。また、子どもたちが放課後の時間を過ごすこともできるこのセンターに、SHAREとJVCは本や遊具を提供している

新興工業国の一つとして成長
を続ける南アフリカ共和国。今
年6月のサッカーワールドカッ
プ開催を控え、今、世界中の注
目が集まっている。同時に、必
ずといってよいほど語られるの
が、この国の深刻な貧困問題だ。
アパルトヘイト（人種隔離政策）
が撤廃されてから15年以上がた
った今も、黒人社会の非就業者
率が6割に達するなど、国内には
大きな格差が存在し、低所得者
層の暮らしは一段と厳しくなっ
ている。
それを助長しているのが、総
人口の12%に当たる570万人
が感染しているといわれるHIV
/エイズのまん延だ。労働人口
（15〜49歳）の5人に1人が
HIV感染者であり、エイズで
毎日約1000人が亡くなっ
ている。エイズの発症を遅らせる
抗レトロウイルス薬の普及も、
2〜3割程度にとどまる。
そして、HIV/エイズは大
人だけの問題ではない。現在南
アフリカには、片親もしくは両
親をエイズで亡くした約200
万人のエイズ遺児がいると推定
されており、その数は年々増え

在宅介護のボランティア研修の様子。抗レトロウイルス薬の服用も指導する彼らには、多くの知識が求められる



を受けていた。

「彼の目の前に広がっていた大きな可能性と尊い命が、簡単に奪われてしまった。HIVに感染さえしなければ…」

HIV／エイズで両親を亡くし、しばらく孤児院で過ごした後、祖母に引き取られていたこ



子どもたちの保護者に、ガーナビーズを用いたプレスレット(右)の作り方を説明する浅里さん。「任期が終わっても彼ら自身で活動が継続できるよう、うまく引き継いでいきたい」と意欲的だ



の幼児。母子感染によるエイズの発症で、半年間で徐々にやせ衰えて元気がなくなり、09年11月に亡くなってしまった。

若年層を中心に、HIV／エイズが広がるガーナ。抗レトロウイルス薬の普及も、20%以下に過ぎない。そしてこの国では、

把握されているだけでも14万人近いエイズ孤児が存在するといわれている。サッカーが大好きな子、算数が苦手な子、恥ずかしがり屋、いたずらっ子…。世界中のどこにでもいるであろう、一見普通のこうした子どもたちが、HIV感染者であるということから、さまざまな心理的負担と命の危険性と隣り合わせに暮らしている。

HIVに感染した子どもの保護者には、路上販売や個人商売でかろうじて生計を立てる者や無職の者も多く、生活は厳しい。食事や健康面など、子どもたちへの悪影響も懸念される。そこで浅里さんは、収入向上活動としてガーナ伝統のビーズを使ったプレスレット作りを行っている。初めは乗り気でなかった保護者たちも、海外から来るNGOのボランティアたちによって作品が飛ぶように売れるのを見て、今では子どもたちをひざに乗せながら、とても意欲的に製品作りに取り組んでいるという。

「HIV感染者やエイズ孤児は、不安や厳しい現実と闘いな



収入向上活動に加え、浅里さんは、学校や地域を回って行う参加型のHIV／エイズ予防・啓発活動にも協力している

がら、たくましさ、優しさ、笑顔忘れずに力強く生きている」と浅里さん。「彼らと気持ちを共有することで、私も多くを学んでいるんです」と語る。

「HIV／エイズに負けず、子どもたちが子どもらしく生きるために」。そんな思いを込め、南アフリカやガーナで、そして各地で、多くの人々が支援を行っている。道のりは決して平坦ではないが、いつしかその情熱が実ると信じている。

子どもに対する虐待は違法性が不明確であり、世界中にまん延している。虐待のトラウマは心身ともに不安定な状態を生み出し、未就学、傷害、性感染症、HIV／エイズ、望まない妊娠などの問題にもつながる。公にならないケースも多く、正確なデータ収集が困難。



スラムの子どもたちへの虐待をなくすために

ニカラグアの子どもたちは、極めて過酷で危険な環境下にある。首都マナグアなどで行われた調査によると、12歳以下の35%が性的暴力の対象となり、しかもその70%が養育放棄に遭っているという。出生届すら出されていない子どもが約2万人いるというデータもあるほどだ。彼らは学校にも行けず、ストリートチルドレンの予備軍となっていく。

こうした子どもを脅かすリスクを取り除くため、JICAは2007年3月より、ニカラグア青



(上)プロジェクトが養成した地域のリーダーが、父母を対象に暴力や非行などの予防方法について講習を開く
(下)プロジェクトでは子どもたちの健全な成長を促すため、絵画やスポーツなどを通じたレクリエーションにも力を入れる。自分でつくった作品をうれしそうに掲げるスラムの子どもたち

少年・子供・家族省とともに、マナグアのスラムで、暴力や犯罪、薬物中毒などの予防を目指し、「青少年とその家族のための市民安全ネットワーク強化プロジェクト」に取り組んでいる。

プロジェクトが何よりも重視しているのは、「地域の人々が主体となって現状を変えていく」ということ。そのために、まず地域のリーダーとなるべき人材を養成し、彼ら自身が保護者に呼び掛け、薬物や暴力、子育てなど、各家庭が直面する問題について学ぶ講習を開く。そして次に、講習に参加した保護者たち自身がその問題の解決に向けて何が必要か

を考え、学校の清掃をはじめとする社会活動などのアイデアを、計画・実施していくという仕組みだ。

さらに、保護者を対象にした手工芸品教室を開くなど生涯学習活動も実施。学んだことが収入に結び付けば貧困が緩和される。同時に、学習を通じて保護者が新しい視点を持ち、家庭内のコミュニケーションの在り方が変化すれば、子どもが置かれている環境が改善され、非行や犯罪の防止にもつながるからだ。

「子どもをめぐる暴力や非行、犯罪を未然に防ぐには、国として制度を確立することが重要であ

地域住民が一体となり 子どもたちを守る

全国で60万人もの子どもが暴力の危機に直面しているといわれるニカラグア。暴力による子どもへの虐待は、現在、深刻な社会問題となっている。

り、プロジェクトの最終目標にも定めています。今では、スラムに住む多くの人々が活動に参加してくれるようになり、予防活動に対する意識も高まっています」とJICA専門家の佐藤真江なつえさんは話す。

そして08年11月、佐藤さんにうれしい知らせが。地域住民が一体となって進めてきたこの活動が「社会リスク予防活動ガイドライン」としてニカラグア政府により正式に制度化されたのだ。地域で子どもを守るという地道な取り組みが今、彼らを虐待の危機から救おうとしている。



世界の子どもと向き合う青年海外協力隊

セントルシアでは、家族制度が日本と大きく異なり、婚姻率が低く、女性が一人で子どもを育てるケースが多くなっています。また、児童虐待や非行、少年犯罪も後を絶たず、少女に対するレイプ事件や家庭内の性的虐待が日常的に起きているのが現状です。ガールズセンターではそのような問題を抱える12～16歳の少女たちを保護して、私はクラフトや数学を教えています。いずれ彼女たちが卒業して自立していくため、直接的に仕事に結び付けよう、今は特に洋裁技術の向上を図るための方法を模索しています。

フランシーナは母親から無視されたり身体的な虐待を受けたりして、小学校も休みがちで中学に進学できませんでした。卒

業後しばらくは家事をしたり、妹の面倒を見たりして生活していたのですが、祖母がセンターに送ることを決めたようです。地元のコミュニティーでは、母親のことで肩身の狭い思いをすることも多いようで、「みんなが私に親切してくれるセンターにいる時が一番楽しい」と言っています。彼女たちが将来に明るい光を見いだせるよう、少しでも力になればと思っています。

フランシーナ・アレキサンダー (15歳)
家族構成：継父、母、妹3人、弟
好きなこと：勉強する
つらいこと：地元に戻る
一つ願い事をするなら?：家を建てたい
将来の夢：シェフ

阿部 由佳
セントルシア 青少年活動 福岡県出身
アプトン・ガーデンズ・ガールズ・センター



唐澤 直子
ニカラグア 青少年活動 神奈川県出身
NGOシーアラビータカサ・ホセマリア



元 ストリートチルドレンの更生施設で、子どもたちの健康管理を担当しています。具合が悪くなった子を病院に連れて行ったり、簡単な傷の手当てをしたりといった保健業務が中心ですが、実際の生活はもっと雑多です。学校の宿題、読書、パソコンの練習に付き合うこともよくあります。また、一緒に食事したり、掃

クリスチャン・アントニオ・シスネ・ロッハ (15歳)
家族構成：継父、母、兄、弟
好きなこと：新しいことを覚える
つらいこと：自分の悪い所を直す努力をする
一つ願い事をするなら?：高校に進学して英語を勉強したい
将来の夢：弁護士

除はしたのか、洗濯はしたのか、シャワーは浴びたのかと、ときに疎まれながらも、母親のように小言を言っていますが、子どもたちに目いっぱい愛情を注ぎ、そして、彼らからの強烈な愛情を受け取ることが、私の最大の役割だと思っています。

クリスチャンは、掃除など施設の仕事を積極的に手伝ってくれる男の子です。パソコンやバイクの運転など、新しいことを覚えることにとっても意欲的なのですが、知らないから、知る機会がないから、できないことがたくさんあると感じることがあります。知ること広がる世界、挑戦するチャンスを得ること広がる可能性があると感じて、私自身からできるだけ多くの情報を発信していければと思っています。

ベトナムには特別支援学校の数が十分になく、設備もあちこち壊れていて安心して遊べる環境ではありません。また、子どもをたいて指導するのが一般的なようで、先生が怖いから言うことを聞かないというスタイルになってしまっています。そもそも先生の数が足りず、子どもが出ているサインを読み取れる大人が近くにいないため、コミュニケーション能力が育ちにくいように感じます。子どもたちは言いたいことが伝わらず、それが大きなストレスになるようにも見えます。

カーは視覚障がいのある早期教育のクラスで4人の幼児・児童と学習していますが、目がまったく見えなため、誰かが出したおもちゃを踏んでしまうこともありますし、ほかの

子が先生にしかられている時、その状況が分からずより恐怖感を感じるようです。また、学校に視覚障がいの子どもが活動しやすい環境が整っていないため、食事や着替えなど、まだまだ一人でできないことがたくさんあります。今後は私が以前勤めていた盲学校など日本の例を参考に、就学前の子どもに何をどのように教えるか、その指導方法を同僚の先生に伝えていきたいです。

グエン・ティン・カー (5歳)
家族構成：父、母、姉
好きなこと：友達と学校で勉強する
つらいこと：歩いて移動する(目が見えないため)
一つ願い事をするなら?：おもちゃがたくさん欲しい
将来の夢：学校の先生

波田野 圭子
ベトナム 養護 埼玉県出身
グエンディエンチエウ特別支援学校



吉川 祥太
ヨルダン 体育 茨城県出身
ジェラッシュキャンプ小中学校



僕 が活動しているヨルダンのパレスチナ難民キャンプの小中学校では、1つの校舎を2つの学校が午前と午後に分けて使っています。赴任したばかりの時、ごみやジュースの破片が散らばっているグラウンドで、子どもたちが裸足で駆け回っているのを見て驚きました。またこの人々は国連の定める難民の定義に当てはまらないため市民権がなく、他のキャンプから

ムハンマド・アブシー (11歳)
家族構成：父、母、兄2人、姉2人、妹2人
好きなこと：アラビア語と体育の授業
つらいこと：テスト
一つ願い事をするなら?：日本に行きたい
将来の夢：サッカー選手

偏見や差別もあり、閉鎖的な空間です。ある日の帰り道、野菜とパンを手一杯に持ったムハンマドと偶然会いました。彼はその日学校に来ていなかったで理由を聞くと、「家の手伝いをしてたんだ。今日は体育だったよね、ごめん」と言い、言葉に詰まっていた僕にパンをつくれました。「これは家族の分だろ」と最初は断りましたが、「シヨータは家族だ!」って言うてくれたんです。家族や仲間を大切にすることは彼らから学んだ大きな財産です。

難民キャンプで生きる彼らにとって、自由に運動できる場所、時間は本当に限られています。それでも僕は彼らの夢を守るために、その状況を少しでも改善していきたいのです。

ミクロネシア連邦では、学校に行く、遊ぶ、けがをしたら治療を受けるといった、日本でいう“当たり前”に近い生活を送ることはできます。飢餓で命を失う子どももストリートチルドレンもいませんが、「教育」の重要性が認識されておらず、教員の人材・指導力不足が深刻な問題です。学期の途中で担任が変わったりして効果的な指導が行えず、子どもたちは積み重ねの学習ができないまま高学年になってしまいます。算数を担当している私は、ただ解き方を覚えるのではなく、考えることが楽しい!と思ってもらえるよう授業を工夫しています。

ジャスマンは笑顔の素敵な女の子です。登校途中にきれいな花が咲いていると、それを摘んで私にプレゼントしてくれます。幸

せのおすそ分けです。あの子、かけ算ができるようになったよ!と、まるで自分のことのように喜んで報告しに来てくれた時もあります。ミクロネシアの子どもたちと接していると、笑顔がどれだけ周りの人を幸せにするのかを実感します。モノやおカネは関係ない、毎日を“素敵”にする方法を、私は彼女たちから学んでいます。

ジャスマン・ケラーニ・レイチェル・イスマエル・ルーイ (8歳)
家族構成：父、母、弟3人
好きなこと：友達と遊ぶ
つらいこと：家の庭掃除
一つ願い事をするなら?：ハンナ・モンタナ(大好きな映画の主人公)に会いたい
将来の夢：フライトアテンダント

田口 佳奈
ミクロネシア連邦 小学校教諭 兵庫県出身
マレム小学校



内藤 久美子
ルワンダ ソーシャルワーカー 静岡県出身
フィデスコ・ルワンダ



路 上生活で生き抜いてきた子どもたちは、人を信頼したり、特定の人に愛情を示すことを恐れているのではないかと感じることがあります。悲しいですが、うそや盗みは日常茶飯事、洋服や石けんなど盗んだものを売ったお金で、タバコやマリファナなどの薬物を買う子もいます。私が活動している施設では、問題を体罰で

エマニュエル・ンシマナ (11歳)
家族構成：母、姉、兄
好きなこと：算数の勉強
つらいこと：サッカーの試合でメンバー交替させられるとき
一つ願い事をするなら?：サッカーのスパイクと靴下がほしい
将来の夢：銀行員

片付けようとする習慣がまだ残っているのも事実です。

エマニュエルも学力不足や貧困からくる複雑な家庭環境などの問題に直面していますが、立ち止まって悩むのではなく、前向きに生きています。自分のものを一人占めないで他人に分けてあげられる優しさ、物質的には恵まれていないけれど、廃物を利用していろんなものを作って遊べる創造力は素晴らしいです。今私にできるのは、子どもたちに“楽しみ”を提供していくこと。彼らの支えとなって、己を否定しない生き方をしていってほしいかかわっていきたい。職場の先生たちには、「体罰がなくても子どもは変わる」ということに気付いてもらいたいと思っています。



コミュニティの保護者たちは、プロジェクトが行う研修を修了すると、佐藤さんから修了証が手渡される

神様がNAOEを 運んで来てくれた

ジェンダーやマイノリティーをテーマに日本やアメリカで研究生活を送っていた佐藤真江さんが、一転して、国際協力のゲンバに飛び込んだのは2000年のこと。青年海外協力隊員としてドミニカ共和国中部のヤマサという村で村落開発に携わったのだ。

「厳しい開発途上国の現実を知って、人々に寄り添ってみたい」

そんな思いで飛び込んだゲンバだったが、そこでの体験は、生活環境の厳しさなどから「人生観を180度変えてしまうような日々」だったと言う。しかも、活動は計画通りに進まない。現地スタッフの家族や子どもの問題、間違いや失敗の数々…。現地の人々の生活にどっぷりと浸かり、涙あり、笑いあり、ときには怒りありの中で活動は進んでいった。

達成感を覚えたのは、2年間の任期が終わりに近づいたころだ。村の人々と一緒に改良かまどを作った。土の上に置いた石に鍋をかけるだけのかまどから、熱効率の良いかまどに改良することで、特に女性たちの暮らしが大幅に変わった。時間にゆとりが出る。料理を作るのも楽しい。後任隊員の努力もあって、100台以上の改良かまどが村に広がっていった。

「国際協力のテーマは、日々の暮らしの中に埋もれています。今何が必要とされているのか、人々の思いを感じ、共感する力が必要だと強く思いました」

その時、村の女性が掛けてくれた言葉を、佐藤さんは今も忘れない。「神様がNAOEを運んで来てくれた」

厳しい途上国の現実に、心から達成感を感じた瞬間だった。

犯罪や暴力を未然に防ぐために

現在、佐藤さんは同じ中米のニカラグアで、JICAが実施する「青少年とその家族のための市民安全ネ

JICA専門家 Sato Naoe 佐藤 真江さん



プロジェクトのスタッフたちと手工芸の作品について話し合う佐藤さん

ットワーク強化プロジェクト」の専門家として活動している。目的は、首都マナグアのスラムで、青少年犯罪や子どもに対する暴力を防ぎ、住みやすい社会をつくっていくことだ。

プロジェクトではまず地域のリーダーを養成し、地域が一体となって犯罪や暴力を予防していくことの重要性を彼らから父母に伝えていく。また、青少年と保護者の生涯学習活動として手工芸教室なども開催。現金収入を得て、貧困からの脱却を手助けするためでもある。さらには、青少年の健全な成長を促すことを目的としたレクリエーション、地域内の警察、学校、保健所と連携して、暴力問題が起こった時の通報システムをつくるなどといった活動も行っている。

こうした取り組みを通して、これまで犯罪から身を守ることにのみが重視されていたスラムに「地域ぐるみで犯罪を未然に防ぐ取り組みが必要だと考える人」が増えてきた。見え始めた成果に、現地スタッフのモチベーションも高まり、佐藤さんは確かな手応えを感じている。「スラムでの生活はとも厳しいです。それでも、バラック小屋の庭先で日が暮れるまで講座を開き、暑い中、子どもたちのためにボランティアで活動をし

ている住民を前にすると、今、地域の人々が本当に強いはずなでつながっていているのだと、心を打たれます。人と人との結び付きは、人と人がただつながるだけでなく、心という人だけが持つ尊い価値がある。そこ成り立つものだを教えてもらっている気がします」

そして心は「感動で動く」と佐藤さんは言う。佐藤さんはある日、スラムに住むおばあさんからビーズでできた手作りのピアスをプレゼントされた。彼女は、プロジェクトで開いた手工芸教室でスキルを学び、今では、それを生かして現金収入を得ている。「学ぶことは永遠に終わらないのよ」

「おばあさんのこの言葉に、私は感動と勇気ももらいました。私もまた、これから先、いろいろな経験の中で学んでいきたいと思えます」

佐藤さんの変わるこののないテーマは、子どもが抱える問題を社会全体で解決していく仕組みづくりだ。「そのためには、人々との心からのコミュニケーションは欠かせないと考えています。いつも心を開いて人々に接し、胸を打たれたことはすぐに相手に伝えていきたい。私の感動が伝わり、共鳴して、やがて大きなうねりとなるに違いないと信じているんです」 (19ページに関連記事)



さとう・なおえ

1970年静岡県出身。カリフォルニア大学デービス校、富山大学大学院、名古屋大学国際開発研究課博士課程修了。2000～02年、青年海外協力隊・村落開発普及員としてドミニカ共和国で活動。02年よりJICAジュニア専門員、ニカラグア事務所の企画調査員を経て、07年7月より現職。

(上)協力隊時代、改良かまどを村人たつとつくる佐藤さん(右)父母を対象に実施された手工芸教室の修了式にて



「感動する力が、人の心を動かしている」

開発途上国のコミュニティが抱える問題に取り組む佐藤真江さん。

最も大切にしていることは「地域の人々への共感」。

2000年以来、中米を舞台に、ゲンバのさまざまな課題に挑戦し続けている。

第14回

ゲンバの風





(左)佐敷小学校のチャリティーバザーにて。1円でも多く集めようと、一生懸命お客さんに声を掛ける (右)カンボジアの子どもたちと折り紙で交流

知らなかったことが
恥ずかしい



熊本県八代市と鹿児島県薩摩川内市を結び、オレンジのマークが印象的な肥薩おれんじ鉄道—八代駅から電車に乗ると、目の前に広大な不知火海が飛び込んできた。行き先は熊本県葦北郡芦北町。人口約2万人のこの小さな町は、老若男女、誰もが気軽に参加できる、町ぐるみの国際協力、で有名だ。

1996年から芦北町国際交流協会が中心となって実施している「カンボジア学校建設支援」もその一つ。「カンボジアの子どもたちのために募金活動がしたい」。授業で学校に行けない子どもがたくさんいることを知った、芦北町立佐敷小学校の児童の言葉がきっかけだった。それから14年、芦北町はNPO法人JHP・学校をつくる会を通じて学校建設の支援を続けている。

募金活動の主な担い手は、芦北町の子どもたちだ。佐敷小学校は毎年

カンボジアの子どもたちに 夢と学びの場を

熊本県南部に位置する葦北郡芦北町は、町の方針の一つに「国際交流・国際貢献」を掲げている。その代表的な事業がカンボジアの学校建設支援。これをリードしているのは、芦北町の小学生たちだ。

芦北ひまわり第4学校の子どもたちと芦北町の訪問団



さんでお菓子を買った時、おつりももらった募金箱に入れる。それが日常の光景となっている。

彼らの笑顔に出会うために

2009年12月、芦北町が建設を支援した4校目の学校「芦北ひまわり第4学校」が首都プノンペン郊外のスイサカウ村に完成。贈呈式に出席するため、竹崎一成町長率いる30人がカンボジアに飛んだ。もちろん、学校建設に大きく貢献した町内の小中高生も15人参加。岩本さんをはじめ、青年海外協力隊（ポリビア・村落開発）に現職参加した芦北町役場企画財政課の上野友晴さんなどが、引率メンバーとしてサポートした。

「カンボジアの現状を自分の目で確かめたかった」という佐敷小学校6年の永里優香子さん。「贈呈式では、本当にたくさんの人が迎えてくれてびっくりしました。ありがとうという言葉、子どもたちのきらきらした笑顔を見て、私たちがしていることが少しは役に立っているのかなと思いました」。

一方で、「話には聞いていたけど、靴を履いていない子がたくさんいて驚いた」と言うのは一村満輝くん（大野小学校6年）。「でも、人に頼らないで何でも自分でやっていて。刺激を受けました」。数日間の滞在だった

が、彼らなりに多くのことを学んだようだ。上野さんも「子どもたちは本当にたくましい。私たち大人よりもすぐに現地になじんで、たくさん感じ取ったようです」と目を細める。

芦北町の国際協力について、「単にカンボジアに学校を建てる」ということだけではない。異国に思いをはせることは、芦北の子どもたちの心も豊かにします」と竹崎町長はその意義を語る。「私たちの取り組みは、

町の「伝統」になりつつあります。15年目を前に、今が一つの節目。この伝統をどう守り、発展させていくか。新たな方向性を考える時期にきています」。

海を越えて共に助け合い、刺激し合いながら、成長していく両国の子どもたち。世界中どこにいても関係ない、純粹に「人」を思いやる心——芦北町の小学生から、忘れかけていた大切なことを学んだような気がした。



(上)「カンボジア募金米」の田植えをする大野小学校の児童たち。田植えから収穫まで、全校児童が参加して行われる
(左下)スイサカウ村に建設された芦北ひまわり第4学校。「ひまわり」という言葉は、町民から公募して決定したもの。ひまわりのように明るい学校になってほしいという願いが込められている
(右下)カンボジアの子どもたちに空手の形を教える竹崎町長

1月、チャリティーバザーを開催。児童が学年ごとにお店を開いて日用品などを販売し、その収益が支援に回される仕組みだ。また、芦北町立大野小学校は転作田を活用したコメづくりに挑戦。「カンボジア募金米」と称して、毎年11月に芦北町国際交流協会主催のイベントで販売している。

「水の管理をしたり雑草を抜いたり、たくさん作業があるので大変です。でも、カンボジアのために何かしたいと思って」（5年生遠原綾子さん）。今年からは冬の時期も活用し、新たにサラダたまねぎの栽培を開始した。「農作業はお手伝いで慣れているから大丈夫！」とみんなやる気満々だ。

芦北の子どもたちは毎年数回、芦北町国際交流協会の岩本賢二さんから、カンボジアについて授業を受ける。カンボジア渡航歴10回、当初から支援にかかわってきた岩本さんから聞く悲しいストーリーの数々。「学校に行けないだけじゃなくて、食べ物や水も十分じゃないなんて。今まで知らずに生きてきた自分が、恥ずかしいと思いました」と佐敷小学校6年の丸山真由子さんは話す。

今では、町中の至る所に「カンボジア学校建設支援」と書かれた募金箱が置かれている芦北町。家族でレストランで食事をした時、駄菓子屋



ココロとココロ

～届け 私たちの思い～

開発と権利のための
行動センター

地域住民の手で勝ち取った平和

「この地域では、多くの若者が将来の見えない日々を送っています。5年ぐらい前から、若者の暴力が広がり、若者たちが死んでいます。暴力を防がないことにはどうにもなりません。そのためには真剣な取り組みが必要ですし、さまざまな支援も必要です。このままでは、20年先には私たちの地域のアイデンティティーを持った若者はいなくなってしまうです」

中南米の先住民族を支援する「開発と権利のための行動センター」(以下、行動センター)代表の青西靖夫さんが、2008年5月に行動センターのブログで発信したメッセージだ。これは、グアテマラ西部のキチエ県コツツアルで若者たちの教育や社会参加を支えるNGOコツツアルの代表フリオ氏の言葉だった。

長らく続いた内戦は、村々に暴力の傷跡を残した。さらに、マラスと呼ばれる暴

知ることから始まる支援と連帯

コツツアルは先住民族が暮らす地域でもあり、内戦が終結した今も、先住民族が抱えるさまざまな問題が残されている。それを自らの力で解決していけるよう、側面から応援していこうというのが行動センターの活動だ。

行動センターがグアテマラで活動を始めたきっかけを「そこに、自分たちで何とかしようとする人たちがいたから」と青西さんは語る。そしてコツツアルへ行った最初の支援が、彼らが活動を維持していくために必要なパソコンを提供すること。そのための資金として、JICA基金が活用されている。

導入されたパソコンでは、コンパバスの会計管理やデータベースの作成などが行われているほか、現在5台のパソコンを使って、48人の若者たちにパソコンの使用方法などを教える研修が実施されている。スキルを身に付ければ、安定



近隣ペテン県の住民組織による自然保護区管理を視察し、土地の利用方法を学ぶ先住民族



政府や地方自治体、NGOなど、地域内のさまざまな機関との関係の在り方について、ワークショップ形式で議論する先住民族と行動センターのスタッフ

した職を得ることも決して夢ではないのだ。行動センターの支援は、こうした職業訓練だけではない。ときに、自然資源の利用などをめぐって先住民族の間で対立が生じることもあるため、彼らが抱える土地問題にも取り組んでいる。貧困から脱却し、安定した生活を送るためには、そのような問題を解決していくことが不可欠だ。

「中南米は先住民族が多く、多様性に富んでいます。スペイン語という共通言語でいろいろな人々とコミュニケーションできるという強みも持っています。つまり、それぞれの地域で土地問題とどう向き合っているの

真の平和を求め 若者たちへ

1996年まで36年間続いたグアテマラの内戦は、20万人もの死者を出し、今も国内各地に深い傷跡を残している。こうした中で、「開発と権利のための行動センター」は、若者の社会参加を促進する現地NGOコツツアルへの支援を通じて、内戦後のよりよい社会づくりに取り組んでいる。



行動センターが寄贈したパソコンを囲んで。パソコンの導入により、コツツアルの活動の可能性が大きく広がった



か、国際法をどのように使っているのか、判例はどうかなど、さまざまな経験を共有し、自らの活動に役立てられる共通項を持っている。青西さんたちは、そのための橋渡し役として、専門家や活動のキーマンなどを紹介している。国境を越え、地域と地域、先住民族と先住民族とをつなぐ仕事だ。そして、もう一つ。日本社会に向けて中南米情報を積極的に発信し、広く紹介することも行動センターが重視している活動だ。

「知ることとは、現地に思いをはせることにつながるのではないでしょう。か。日本に入ってくる中南米の人々の声はあまりに少なすぎます」

行動センターのホームページから中南米で日々起こっているさまざまな出来事を発信し続けている青西さん。「知ることによって、地球に生きるみんなが心を寄せていくような世界をつ



JICA基金を活用して実施されたパソコン研修で学ぶ若者たち

開発と権利のための行動センターの活動の様子や団体の詳細はホームページでご覧いただけます。
<http://homepage3.nifty.com/CADE/>
<http://cade.cocolog-nifty.com/>

カグループが村の中に入り込み、やがて住民までも巻き込んで無意味な抗争を繰り返すようになっていった。小さな村の中の撃ち合い。内戦がもたらした悲しい現実の数々は、人々の生活を圧迫していった。

「警察も頼りにならず、横行する暴力を食い止めたのは、コツツアルで暮らす人々自身でした。自衛組織を作り、ときには強硬に、またあるときには柔軟な姿勢でマラスに立ち向かい、村の安全を守ろうとしたのです」と青西さんは話す。

その結果、何とか暴力を抑え込むことに成功した。そして村の安全が確保されるにつれ、より良い社会をつくりたいと考える若者により、コツツアルの活動は活発になっていった。



行動センターは地域住民組織のリーダー養成研修も実施。地域内で活用できる資源にはどのようなものがあるかを話し合う

くりたい」

青西さんは、自分たちの問題を自分たち自身の手で解決しようという先住民族の人たちの心に、日本からエネルギーを贈る地道な活動を続けている。

あなたの小さな一歩から始まる国際協力 世界の人のためのJICA基金

JICAでは、国際協力に関心のある日本の皆さまからの寄付を、開発途上国の貧困削減や環境保全への取り組みに活用する「世界の人のためのJICA基金」で受け付けています。皆さまのご支援をお待ちしております。

寄付金の使われ方

お寄せいただいた寄付金は、途上国の貧困削減、医療や教育の提供、環境問題の解決などに取り組むNGOの活動に充てられます。各支援活動や寄付金事業収支についてのご報告は、「JICA寄付サイト」で公表します。

寄付の方法

「JICA寄付サイト」からお申し込み下さい。クレジットカードによる決済や、銀行・郵便振込みなどがお使いいただけます。

JICA寄付サイトURL: <http://www.kifu.jica.go.jp/>



Q&A

JICA

に聞きたい!

Q

授業で途上国について教えたい、 どうすればいい?

「開発途上国が抱える課題や、自分と世界とのつながりについて考えてほしい」。そんな思いで子どもたちへの教育を実践する先生のために、JICAはさまざまなメニューを提供している。



(上) 研修の成果を踏まえ、学校で開発教育の授業を実践する教員
(左) 訪問したラオスの小学校で、子どもたちと交流する教師海外研修の参加者

JICA地球ひろば
市民参加協力促進課

樋口 創

PROFILE

大学院修了後、2005年JICAに就職。無償資金協力部(当時)、カンボジア事務所での研修、人間開発部を経て、08年5月より現職。



「先生方の開発教育の実践が 実りあるものになるよう、お手伝いしています」

より効果的な開発教育の指導法を学びたい方には、「開発教育指導者研修」がおすすめです。JICAの各国内機関が地元のNGOなどと連携して実施しており、参加型の学習

も安心して参加できます。また、代表的なものに、途上国を訪問し、人々の暮らしぶり、JICAや現地で活躍するNGOの活動などについて学び、帰国後、その経験をもとに実際に授業を行う「教師海外研修」があります。派遣前の研修から帰国後の授業の実践までJICAが継続的にサポートしており、開発教育に興味があるけれど、何から始めたらよいか分からない、という方でも安心して参加できます。

JICAでは、未来を受け継ぐ小中高生たちが途上国に関心を持ち、彼らの国際協力活動への理解・参加につながるよう、小中高での開発教育の推進に力を入れています。そして、指導に当たる先生方のために、授業の実践スキルを磨く参加型の研修や、授業で活用できる補助教材の提供など、さまざまな支援を行っています。

「開発途上国の同年代の子どもの生活をしてるんだらう」「普段何気なく食べている食材は、どんな国からやって来るのだろう」―開発教育(国際理解教育)では、日本での私たちの暮らしにもつながる身近なテーマから、世界の現状や途上国の課題、多様な価値観・文化などを扱っています。

先生のためのJICAの開発教育メニューはこちらから!

JICA地球ひろば「教育関係者の方へ」
<http://www.jica.go.jp/hiroba/educator>

お気軽にご相談ください!

国内機関連絡先
<http://www.jica.go.jp/about/structure/organization/domestic.html>
国際協力推進員
<http://www.jica.go.jp/about/structure/organization/suishin>

まずはJICAの国内機関や、各都道府県に配属されている国際協力推進員にご相談ください。そして、子どもたちの国際理解への第一歩を後押しするため、お気軽にJICAを活用してください。

さらに、JICAボランティアの経験者やJICA職員が直接学校を訪問して授業を行う「国際協力出前講座」では、途上国の現状、人々の暮らしや文化、歌やクイズを盛り込んだワークショップなど、多彩なプログラムを実施しています。

また、先生方が授業で活用できる補助教材も作成しています。環境問題や感染症など、身近に迫る地球規模の課題をマンガで学ぶ「壁新聞」、学校に行けない途上国の子どもたちの現状をイラストで分かりやすく解説した小冊子「学校に行きたい!」など、総合学習の時間にもぴったりの各種教材をそろえています。

「国際協力マルチアクターサミット in 函館」開催

01

12月17、19日、北海道函館市で「国際協力マルチアクターサミット」が開催されました。このイベントは、北海道と東北地方で国際協力を実践する個人・団体が集まり、地域が持つリソースと国際協力を結び付け、地域活性化にどう還元していくかを考えることを目的としています。「マルチアクター間の連携によって生まれる一歩進んだ国際協力の実践」というテーマのもと、40人の参加者たちは3日間にわたりさまざまな連携のアイデアを議論し合いました。

最終日には、今回のサミットで得られた知見をどのように生かし今後の行動に結び付けていくか、参加者の決意をサミット宣言文として採択。すでにいくつかの連携企画は実現に向けて動き出しています。



自分たちの経験をもとに、意見交換をする参加者たち

「気候変動枠組条約第15回締約国会議」で途上国政府とともにメッセージを発信

02

2009年12月7、18日、デンマークのコペンハーゲンで、「気候変動枠組条約第15回締約国会議(COP15)」が開かれました。

JICAは開催期間中、開発事業における温室効果ガス削減効果の推計ツールや、クリーン開発メカニズム(CDM)促進に関するサイドイベント(セミナー)を開催。また、ブータン、ベトナム、ザンビアの各国政府が、自国で取り組む気候変動対策について、その現状や成果、課題、提案などを発表するセミナーを企画段階から支援しました。セミナーでは、地方電化事業を題材にJICAが提案しているCDMを貧困削減などに活用する取り組みや、後開発途上国におけるCDM事業促進のための制度改善など、各国政府とともにJICAのメッセージを発信することができ、どのセミナーでも活発な議論が展開されました。



ブータンのサイドイベントで基調講演を行うフドリンチェン環境副大臣(左)

04

澤田康幸客員研究員が「円城寺次郎記念賞」受賞

JICA研究所の澤田康幸客員研究員(東京大学大学院准教授)が、日本経済研究センターが主催する「第2回円城寺次郎記念賞」を受賞しました。同賞は、経済理論の分野で実績があり、今後の活躍が期待される45歳以下の若手・中堅エコノミストに贈られるものです。

澤田客員研究員は、ミクロ計量経済学の手法を用いた実証研究などを通じ、開発途上国の貧困問題やODAに関して問題提起を行ってきました。現在は、JICA研究所で「JICA事業の体系的なインパクト分析の手法開発」、「スリランカにおける灌漑インフラの貧困削減効果」などの研究プロジェクトに取り組んでいます。

03

JICA国際協力中学生・高校生エッセイコンテスト2009「入賞者発表

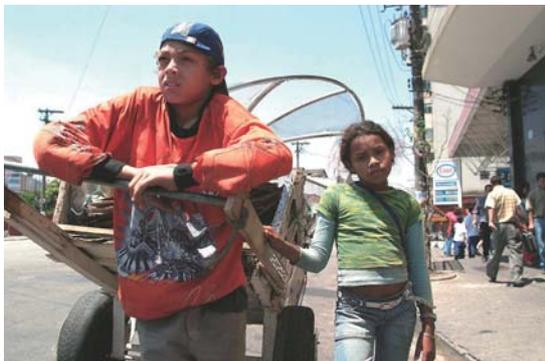
- 「JICA国際協力中学生・高校生エッセイコンテスト2009」の受賞者が発表されました。今回のテーマは「行動し地球と私のためにできること」。7万3536点(中学生の部4万9084点、高校生の部2万4452点)もの力作が集まりました。
- 最優秀賞
 - [中学生の部]
 - 立命館宇治中学校1年 河之口みなさん
 - [Keep On Supporting]
 - 北上市立上野中学校2年 朴志海さん
 - [二つの母国]
 - [高校生]
 - 村田町立村田第二中学校3年 大沼圭吾さん
 - 「今、僕にできること」
 - [高校生の部]
 - 聖心女子学院高等科3年 高橋実紗子さん
 - 「心で」
 - Thomas Jefferson High School for Science and Technology 2年 藤生愛さん
 - 「ハンカチの種」
 - 長野県長野高等学校1年 草間由紀子さん
 - 「実践+継続∞(無限大)」

イチオシ!

D VD

『それでも生きる子供たちへ』

世界の子どもたちの窮状を救おうと、7人の名匠と国連児童基金(UNICEF)、国連世界食糧計画(WFP)がコラボレートした話題作。爆弾を抱えたルワンダの少年兵、サラエボの泥棒一家、HIVに感染したニューヨークの家族、サンパウロの貧民街で廃品を拾って生活する兄妹、カメラマンが幻想の中で見た戦地の子どもたち、ナポリの窃盗少年、北京の路上で働く貧しい孤児と愛に飢えた裕福な少女。異なる7つの国を舞台に、厳しい現実の中でたくましく生きる子どもたちの姿を、7つの国の名だたる映画監督たちが描いている。劣悪な状況にありながら、そこで生きる子どもたちの笑顔は素晴らしく、子どもを見つめる監督たちのまなざしも温かい。



©2005 MK FILM PRODUCTIONS SRI RAI CINEMA SpA

2005年/イタリア・フランス/本編130分、特典約40分
監督：ジョン・ウー、スパイク・リー、ジョーダン・スコット&リドリー・スコット、カティア・ルンド、エミール・クストリツァ、ステファノ・ヴィネルツ、メディア・カレフ
DVDは3,990円(税込)にて好評発売中
発売元：ギャガ株式会社

E VENT

春のみんぱくフォーラム2010 西アジア再発見

国立民族学博物館では、西アジア展示のリニューアルに合わせ、さまざまなイベントを企画している。その一つが、アジア各地を撮り続ける大村次郷氏の写真展「西アジア、祈りの風景」。西アジアの人々が神と向き合う静寂が、写真から伝わってくる。会期中はじゅうたんを作るワークショップや、イラン映画の上映会なども予定されている。

会期：3月30日(火)まで
会場：国立民族学博物館(大阪府吹田市)
開館時間：10時～17時(入館は16時30分まで)、水曜休館(水曜日が祝日の場合は翌日)
料金：一般420円、高校・大学生250円、小・中学生110円
TEL：06-6876-2151
URL：http://www.minpaku.ac.jp/museum/event/w-asia_renewal09_sp.html

B OOK

『HIV/エイズとともに生きる子どもたち ケニア ～あなたのたいせつなものはなんですか?～』

自分にとって大切なものを尋ねられたら、何と答えるだろうか。HIVに感染したケニアの子どもたちの答えが、本書である。例えば、「薬」「水」「家」……。HIVに母子感染し、一生薬を飲まなければいけないこと。免疫力が低下しているので衛生的な食事を取らなければならないのに、水不足で手洗いすらできないこと。差別や偏見が怖くて家から出られないこと。子どもたちの答えの奥に隠されたこうした事実が胸が痛む。平易な文章と写真で分かりやすくまとめられており、小学生にも読める内容となっている。



この本を
1人の方に
プレゼント
詳細は
38ページへ

山本敏晴 著
小学館
1,575円(税込)

B OOK

『国際協力と学校 —アフリカにおけるまなびの現場—』

数ある国際協力の分野の中でも重要な位置を占めるのが「教育」。著者は、長年開発途上国の教育支援にかかわる中で、「教育開発」の名の下でアフリカに広がる近代学校教育が、現地で本当に求められているのかを考えてきた。本書では、第二次世界大戦後の近代学校教育を概観しながら、「なぜ国際協力をするのか」「何のための教育なのか」と、国際協力・教育開発の意味を問うている。一般的には、教育の中心には学校がある、と考えられているだけに、教育を「学校を通じてしか見ることができていない」という著者の指摘は、実に示唆に富んでいる。



この本を
1人の方に
プレゼント
詳細は
38ページへ

山田肖子 著
創成社
840円(税込)

地球ギャラリー vol.17

Venezuela

[ベネズエラ]

文・写真=小松 義夫 (写真家)

種子を触ると魔法のようにパッと開く
俗称カカオ・デ・アグアの花。この種子
を見つけた大人は子どもたちに手渡す

自然に抱かれて育つ
ワラオの子





A.壁が一つもない家でくつろぐ親子。床はヤシ科の植物の幹で作られている

オリノコデルタに住むワラオ族の家の写真を撮りたかった。日本から南米は遠く、長時間のフライトがづらい。ベネズエラ首都カラカスに着き、そこから小さな飛行機を乗り継いでデルタアマクロ州の州都トゥクピタという町にきた。人口は10万人前後だが陸の孤島のような町で、近隣の町まで200キロ以上ある。

情報収集をしやすいうちにオリノコ川に程近い街中の小さなホテルに泊まった。ホテルの主人がたまたまジャマイカの人で英語が通じた。

川岸にボート屋があったので交渉してデルタを回ることにした。次の日、飲料水、食料などを積んでボートは出発し、6時間ほど下った。オリノコデルタの水路は複雑で、潮の満ち干や川の水の増減でいつも変化している。水路によっては引き潮で水がなくなっていたところもあったし、午前中は塩水で午後は真水になる水路もあるという。ここでは川の水と海の水がせめ



B.デルタアマクロ州の州都トゥクピタの舟付き場。ここから下流に向け出発した

B

C



C.オリノコデルタに住むワラオ族は約2万人。女性たちを運ぶ丸木舟と水路で遭遇した
D.トゥクピタの空港には小型機しか降り立たない。眼下にオリノコ川が見えた



D

ぎあっているのだ。

1498年、コロンブスが3回目の航海でオリノコ川河口に停泊した。上流から大量の真水が流れ出てくるのでその奥を大陸だと思ったコロンブスたちは、デルタに住むワラオ族を捕らえ調べようとした。しかしワラオの人々は舟で追いかけてくるスペイン人から逃げ切った、という。彼らが熟知する複雑な地形の水路に入り込んだことが功を奏した。



E.ワラオの子どもは親や家族と一緒に“大きな屋根の下で”成長していく



J

J.水路が合流するところに砂の浅瀬がある。子どもたちの格好の遊び場だ
K.お母さんのお手伝い。オリノコ川の水で食器を洗う



K

小松義夫さんの写真展が開かれます。

「地球のくらし写真展」
会期：3月28日(日)まで
10:00～17:00
※祝日除く月曜休館
場所：県立地球市民かながわプラザ3F 企画展示室
入場無料
問：(財)かながわ国際交流財団 学習サービス課
TEL：045-896-2899
URL：http://www.k-i-a.or.jp/plaza/news/komatsuyoshio.html

地球ギャラリー vol.17



I

ワラオ族の村で二泊したが、寝るときは梁にハンモックをつるして休んだ。上手に寝るコツは少々斜めに横になること。すると身体を空中で、エビのように丸まらず、比較的真っすぐに保つことができ快適だ。同じ屋根の下、家の人たちと一緒にぶら下がるのが何だか楽しい。

ワラオ族は子だくさんだ。彼らは家族の愛情に包まれながら「屋根だけの家」で育つ。ということは、オリノコ川、森の木々、小動物や魚、ワニなど豊かな自然とともに命がはぐくまれていくわけだ。きっと、心豊かな人間になるだろう。

この村に来て穏やかな気持ちになったのは、一緒に過ごした大人も子どもも人間としての誇りを持ち、平穩に暮らしているからだと思った。

F.ワラオ族はベネズエラに住む19の原住民族の一つ。オリノコ川の下流域に暮らす。水辺に建つ家には壁が一枚もなく、人々の気質は昔の日本人に似ている気がした
G.兄弟だろうか？ 仲が良い二人
H.ワラオ族は子だくさん。母親に甘える男の子
I.寝心地のよいハンモックは、昼間はソファやいすとして使われる

F



G



H





ララ州で保健・衛生教育を行う看護隊員



オリノコデルタ地帯で、隊員も参加した現地NGOによる環境教育プログラムに集まった村人



口承伝統を残す活動を通じ、先住民の人材育成に取り組む隊員

JICAの活動 in ベネズエラ

貧困・格差の是正、環境問題の克服を

石油の輸出で国の経済は比較的潤っているものの、ベネズエラでは貧富の差や地域・社会格差が広がっている。JICAは主に青年海外協力隊の活動を通じ、貧困削減や格差の是正、環境問題などに取り組んでいる。

石油、天然ガス、鉄鉱石などの天然資源が豊富なベネズエラ。経済では国家総収入の約半分を占める石油の輸出に支えられ、中南米地域ではトップクラスの所得水準を誇る。だが一方で、石油に依存した産業構造は国際価格の変動に脆弱で、先住民を含む低所得者層の貧困問題も深刻化している。そんな中、JICAは主に青年海外協力隊の派遣を通じ、貧困削減や地域・社会格差の是正、環境保全などに取り組んでいる。また、日本へのベネズエラ人研修員の受け入れも積極的に行っている。

オリノコデルタの大自然とともに、自給自足の生活を営んできた先住民ワラオ族。しかし、近年の社会環境、自

然環境の変化でその生活や文化が脅かされつつあり、自給自足が難しくなったことによる貧困問題も生じている。そこで、協力隊が現地NGOとともに活動。植林によるエコ・ツーリズムの促進と生計向上に努めた。

一方、ボリバル州では、地元NGOによる先住民のための教育機関に協力隊が派遣され、各村落に伝わる口承伝統を文字化し、本に残していく活動を支援。先住民の若手リーダーとの共同作業を通じ、貧困、文化・アイデンティティーの喪失といったさまざまな課題に取り組む人材の育成に貢献した。

ララ州では、看護隊員が保健・医療支援を実施。農村巡回診療の中で、生活環境や人々の健康改善のため

の啓発活動、農村医療の質と効率性の向上支援などを行っている。

さらに、日本で行われる研修では、環境、中小企業育成、保健医療、防災などの分野を対象に研修員を受け入れている。また、ベネズエラが日本方式の地上デジタル放送の導入を決めたのを受け、今年2月に約20人の技術者が参加する研修を実施するほか、JICA専門家の派遣も予定されている。

■JICAの協力実績(人数ベース) 2009年3月31日現在

	2008年	累計
研修員受入	27人	1,278人
専門家派遣	2人	261人
青年海外協力隊	1人	65人

支所開設 2003年

世界6位の産油国。近年はオリノコ川流域でも石油探査が始まっている。



世界最大の落差を誇るエンジェルフォールは、東京タワーの3倍の高さ。世界遺産に指定されている。



首都：カラカス
面積：91万2,050km²(日本の約2.4倍)
人口：2,790万人(2008年)
公用語：スペイン語
宗教：国民の大多数がカトリック
1人当たり国民総所得(GNI)：12,830ドル(08年)
経路：日本からの直行便はなく、カナダ、アメリカ経由が一般的。
通貨：ボリバル・フェルテ(VEF) 1VEF=約43円(2010年1月現在)
気候：熱帯地域に属しているが、標高により気温は大きく異なる。カラカスがある中央平原は4~10月が雨期、11~3月が乾期。南部のギアナ高地などは年間降水量が多く、雨期にはスコールが毎日のように降る。

地球ギャラリー Vol.17

Venezuela ベネズエラ

Illustration / Hori Takao



美人大国として有名。過去に5回のミス・ユニバースを輩出している。



野球が盛ん。2009年のWBC(ワールド・ベースボール・クラシック)では、代表チームがベスト4という好成績を残した。



ベネズエラを代表する料理として、人々に愛されるパベジョン

文・写真=伊勢織穂理 (ベネズエラ元青年海外協力隊員)

- 【作り方】
1. 大きじり1の塩と牛かたまり肉を圧力鍋に入れ、牛肉がかぶる程度の水を入れて煮る。圧力がかかっているから極弱火で12分。火を止め、圧力が抜けるまで置く。
 2. すべての野菜類をみじん切りにしておく。
 3. 肉を取り出し、冷めたら手で細かく裂く。ゆで汁はキッチンペーパーなどでこし、2カップ分を取っておく。
 4. プライパンに油を入れてニンニクを炒め、香りが出たらタマネギを加える。火が通ってきたらクミンと残りの野菜類を入れてよく炒める。
 5. 裂いた肉・ゆで汁・スープの素・塩小さじ1・こしょう・ケチャップ・しょうゆを入れてしばらく混ぜ、水分が少し残る程度まで煮込んで完成。
- ☆圧力鍋がなければ、肉が軟らかくなるまで3時間程煮る。長ネギの緑色の部分や、セロリの葉などを束ねて一緒に入れるとおいしい。

ベネズエラの代表的な定食「パベジョン(Pabellón)」。この食堂でも食べられる一品だ。ワンプレートに、ライス、カラオタ(黒インゲン豆を塩味に煮たもの)、タハータ(調理用バナナをスライスして揚げたもの)、そして今回紹介する「カルネ・メチャータ」(細切り牛肉を野菜と一緒に煮込んだもの)などの定番メニューと、目玉焼き、チーズがセットになつて出てくる。値段も庶民的で安く、いろいろなお味が一度に楽しめるおすすめの一皿だ。

ベネズエラ料理 細切り牛肉と野菜の煮込み 「カルネ・メチャータ」



「11月号を読んで」

■経済成長と気候変動のことが大きく取り上げられますが、感染症についても関連性があると思います。日本は影響を受けにくいと思いましたが、新型インフルエンザの例からも他人事ではありませぬ。地球という枠組みで考えていく必要性をあらためて感じた今月号でした。

(兵庫県・50歳・男性・公務員)

■「死の海」と呼ばれるほど汚染の進んだ洞海湾の写真に、「本当にあの北九州の海なの!？」と我が目を疑ってしまいました。しかし今では、このひどい公害から立ち直った経験が、途上国の支援に活かされているといえます。北九州の方々の強さとたくましさ、そして優しさや温かさが感じられる素晴らしい記事だと思いました。(大分県・33歳・女性・司書)

「12月号を読んで」

■日本の省エネ技術の特集を、なるほど、と思いつつ読みました。これまで省エネとかエコとか言うけど、漠然とした興味を最近のエコブームが引っ張って行ってしまった印象がありました。日本の技術が途上国の経済成長の助けになることは、すばらしいことだと思います。こういう掘り下げた記事はぜひ続けて欲しいと思います。

(島根県・31歳・女性・会社員)

■地元のセカンドハンドの記事が入っていたので、特別支援学級の生徒に読み聞かせた。カンボジアの子供たちの明日の幸せのために小指会ががんばっている姿はそれだけで生徒を勇気づけたようだ。「幸せとは何か?」と記事中にあった。生徒に問うた。「家族といること」と答えてくれた。いつもの授業内容と違っていただけで、生徒とじかに語りあえた。「先生、私も人の役に立ちたい。」そんな目をしていて。さわやかな1時間だった。

(香川県・52歳・男性・中学校教員・工藤護)

本誌へのご意見・ご感想や
JICAへのご質問を
お寄せください。

プレゼント
付き

添付のアンケートはがき、Eメール、FAXから、本誌に対するご意見やご感想、またJICAへのご質問を、氏名・住所・電話番号・職業・年齢・性別・ご希望のプレゼントを明記の上、お送りください。ご記入いただいた個人情報は統計処理およびプレゼント発送以外の目的で使用いたしません。当選者の発表は発送をもってかえさせていただきます。

◎応募締切：2010年3月15日

Email: jica@idj.co.jp

FAX: 03-3582-5745 (『JICA's World』編集部宛)

- ① ラオスの紙布織ランチョンマット
- ② 書籍『HIV／エイズとともに生きる子どもたち』(p30参照)
- ③ 書籍『国際協力と学校』(p30参照)



①



②



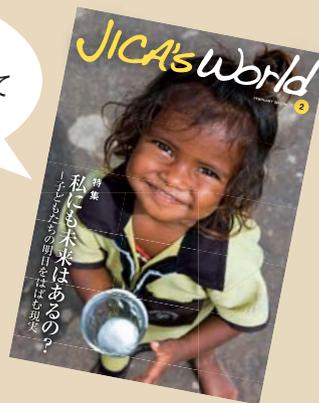
③

本誌をご希望の場合は
送料ご負担(200円)にて
お送りいたします。

申込方法

氏名・住所・電話番号・ご希望の号数もしくは送付期間を明記の上、下記にお申し込みください。

申込先 (株)国際開発ジャーナル社 業務部(発送代行)
住所 〒107-0052 東京都港区赤坂2-13-19 多聞堂ビル
TEL 03-3584-2191
FAX 03-3582-5745
Email order@idj.co.jp
支払方法 「ゆうメール」の着払いとなりますので、
本誌と引き替えに200円をお支払いください。



次号予告 (2010年3月1日発行予定)

アフリカの鼓動

今年はアフリカ独立の年から50周年!
50年の歩みとJICAの支援を振り返りつつ、
近年の開発課題や最新の取り組みについて紹介します。

JICA's World

FEBRUARY 2010 No.17

編集・発行/独立行政法人 国際協力機構 Japan International Cooperation Agency: JICA

〒102-8012 東京都千代田区二番町5-25 二番町センタービル1~6階
TEL: 03-5226-9781 FAX: 03-5226-6396 URL: http://www.jica.go.jp/
本誌掲載の記事、写真、イラストなどの無断転載を禁じます。



©Yuki Asada

森の恵みが生み出したランチョンマット

女性が機織り機の前に腰掛け、一本一本、丁寧に糸を紡いでいく。ラオスでは、祖母、母親から娘へ、各家庭で織り物の技術が伝えられるのが古くからのならわしだ。

どの町のマーケットに足を運んでも、あちこちで目にするのは彼女たちが心を込めて織った色鮮やかな布。すべてが手作り。この世に一枚しかない異国情緒あふれる織り物に、世界中の観光客は誰もが魅せられる。

その中でもここ、首都ビエンチャンの北、バンビエン郡の織り物はちょっとユニーク。一般的な織り物と同様、横糸はコットンかシルクだが、縦糸に、現地の木材を素材にして作られた“紙の糸”が使用されているのだ。

森の国とも称されるラオスは、かつては国土の約7割が緑に覆われていたが、焼き畑や違法伐採などが原因で、今ではその面積が5割以下に減少している。そこでJICAは、1996年より森林保全プロジェクトをスタート。現地の人々とともに、森林の保全・復旧に取り組んできた。

木材を安定した収入源に活用できれば、森を大切に守ろうという意識も高まるはず。そんな願いからJICA 専門家が紹介したのが「紙布織」の技術。男性が木から作った和紙を糸状にし、女性がそれを機織り機で織り込んでいく。まさに、日本とラオスの伝統工芸の出会いから生まれた製品。染色は草木染めで、“自然に優しい”

織り物としても評判だ。

村人たちの森への思いが織り込まれたラオスの紙布織。食卓に温かい彩りを添えてくれるアイテムだ。



機織り機で和紙からできた糸を織り込んでいく女性

★紙布織ランチョンマットを3人の方にプレゼント！
詳細は38ページへ→





小さな幸せを見つける力

女優

黒柳 徹子

KUROYANAGI TETSUKO

PROFILE

1933年東京都出身。NHK放送劇団、文学座研究所を経て女優デビュー。映画、舞台、司会などで幅広く活躍。81年に出版された著作『窓ぎわのトットちゃん』が750万部を超えるベストセラーになった。84年、国連児童基金(ユニセフ)親善大使に就任。毎年途上国を訪れ、たくさん子どもたちと触れ合ってきた。



© UNICEF Japan/2009

25年前、緒方貞子・現JICA理事長の推薦で、ユニセフの親善大使に就任しました。緒方先生がユニセフの事務局長に『窓ぎわのトットちゃん』の英語版を渡して下さり、「これだけ子どもの気持ちがよく分かる人はいない」と言って下さったのも大きなきっかけです。ユニセフと出会わなければ、これだけ多くの世界を見ることはできなかった。私の名前を挙げて下さった緒方先生には、本当に感謝しています。

この四半世紀、私は世界中でさまざまな境遇の子どもたちと出会ってきました。栄養失調で脳に障がいを負い、床を這いずり回る男の子、地雷の恐怖におびえる女の子、学校に行けず家のために働く子どもたち…。みんな何も悪いことをしていないのに、なぜこんなに過酷な人生を送らなければいけないのでしょうか。彼らと真正面から向き合うほど、本当に悲しく、いた

たまれない気持ちになります。

十数年前、エチオピアである女の子に「大人になったら何になりたい?」と聞いたことがあります。すると彼女はまっすぐな瞳でこう言ったんです。

「生きていたい」

こんなに小さな子から、そんな言葉が出てくるなんて…。途上国の子どもたちは、それだけ差し迫った状況にある。それは今も変わっていません。

でもいつの時代も、どこの国に行っても、子どもたちはいつも純粹で元気です。私がソプラノの声で「ハレルヤ」と鳥の鳴きまねをすると、みんなで大合唱になったり。彼らと過ごす時間は、私にとってかけがえのない宝物になっています。

昨年訪問したネパールの盲学校では、8歳くらいの男の子と手をつないでござの上に座っていると、その子が私に「I'm very happy」と言ってくれ

たんです。こんなに些細なことでも、この子は幸せに感じてくれるんだー。涙が出ました。子どもたちは、小さなことから幸せを見つけ出す力があるんですね。

今、私の願いは一つ。とにかく戦争だけはやめてほしい。あんなにムダなものはありません。何の罪もない子どもを狙うというのは一番卑劣なことではないでしょうか。

もちろん、私は世界のすべての子どもたちを救えるわけではありません。でも、よく「絶望しませんか?」と聞かれるのですが、決してそんなことはありません。25年前は、1年間で1,400万人の子どもが5歳になる前に命を落としていましたが、今では920万人にまで減りました。せっかくこの世に生まれてきたのだから、世界の子どものために、私はできることを続けていきたいと思っているのです。